

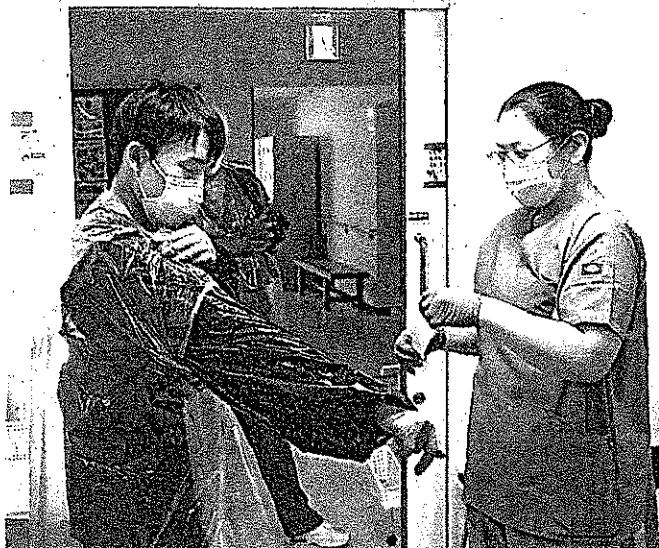
121人感染 古賀の介助現場

千葉の障害者施設 軽症者は入院せず

「二次感染しないよう、全員が細心の注意を払っている」

計121人の新型コロナウイルス感染が確認された千葉県東庄町の障害者福祉施設「北総育成園」。千葉県船橋市から応援に入り、20日、トイレの介助を担当した介護福祉士の男性(43)は緊張感を漂わせた。

「『ハサミで防護服』」
男性は2階の食堂で、ごみ袋を粘着テープでつなぎ合わせた「防護服」を身にまとった。医療用ガウンが不足し、急ぎよ作つたものの床に貼られた緑のテープをまたぎ、ウイルスが飛散している可能性が高い、入所者の暮らし。「レッドゾーン」へ。用を足した入所



診察に向かう前、ごみ袋を粘着テープでつなぎ合わせた「防護服」を着る医師=千葉県東庄町

い知的障害がある。全員が個室で暮らし、職員67人が支えている。

職員32人が感染

その施設を新型コロナが襲った。3月下旬、クラスをまたき、ウイルスが飛散している可能性が高い、入所者の暮らし、「レッドゾーン」へ。用を足した入所

者の尻を支え、便座から立たせた。排泄物がこぼれれば、雑巾で拭き取つた。約2時間の介助を終え、消毒された「クリーンゾーン」に戻った頃には、全身

汗だく。外はコートが欲しいくなる寒さだが、看護師らと「熱中症に気をつけよう」と声をかけ合つた。

県立病院から応援に入った男性看護師(38)はある日

突然、入所者の男性に後ろから抱きつかれた。親しみを込めた行動と思われるが、そばにいた同僚の女性看護師が、すぐに防護服が破れていないかを確認した。男性看護師は「どきつとした。常に二次感染への緊張感はある」。園はのどかな田園地帯の丘にある。入所るのは20代の70人で、多くに重い知的障害がある。全員が個室で暮らし、職員67人が支えている。

国内最大級のクラスターが発生した北総育成園。二次感染を防ぎながら、少ない職員と医師で、知的障害がある入所者の介助と診療を両立させる——。応援を得ながら、その困難な作業に直面している。

「感染者は原則入院」が当時の國の方針だったが、県内には多くの患者を受け入れる病床がなかった。障害がある人が入院すれば、病院側の負担が重くなる」とも明白だった。

どうするか。石出広・支援対策本部長(前県衛生研究所長)らは、異例の決断をした。「軽症の入所者を施設内にとどめて診療する」

△
次感染を防ぎながら、少ない職員と医師で、知的障害がある入所者の介助と診療を両立させる——。応援を得ながら、その困難な作業に直面している。

(寺沢知海、古賀大己)